

吉益羸齋について

岡 利 幸

大阪吉益家の初代吉益羸齋は、古方派漢方の名声を落さず、大阪では評判の高い医者であったが、羸齋に関する資料が少く、その業績はあまり知られていない。

羸齋は幼くして父東洞が死んだので、兄南涯に養育されたが、南涯を批判し、反抗的であったとされている。また南涯が疫癘にかかり、初め自ら小青竜に桃承を兼ねて服していたが、弟羸齋が転方してから病日に悪くなり死亡したといわれている。

はたして羸齋はそのように技術が劣っていたのかと疑われるが、羸齋の著書があまり残っていないのでいろいろと批判されている。

羸齋は著書『氣血水薬極』で「氣に働く薬」を重視しているが、龍野一雄氏は、南涯の氣血水薬徴を補ってあまりあるところがあると述べている。

演者は最近、『吉益羸齋口授方極記聞』、吉益東洞著『方選』、吉益南涯講釈『金匱要略記聞』の三書を入手したので、羸齋の学説業績を主として述べる。

羸齋の『方極記聞』は、方極を氣血水論で講義し、非常に優れた説明をしている。また東洞の実際の治療についても述べているが、村井琴山の『方極刪定』については、約五〇箇所も批難攻撃しているのが注目される。

吉益東洞著『方選』は現存していないといわれているが、『方選』には茶方一九七方、附方一六方、経験方二八方が記載され、吉益家の処方集であり、『類聚方』に類似しているが、東洞の経験方が多数記載してある。

南涯の『金匱要略』に関するものとしては、吉益北洲の『金匱要略精義』のほか、南涯の門人の『金匱要略記聞』が散見されるが、南涯の高弟、難波抱節筆受の吉益南涯講釈『金匱要略記聞』を紹介する。

(岡山県岡山市)